大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

過去という夢とその住民たち：ウォン・カーワァイの『欲望の翼』（1990年）を中心に

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-05-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 楊, 氷
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004433

過去という夢とその住民たち
――ウォン・カーワァイの『欲望の翼』(1990 年) を中心に

楊　　氷

はじめに
1　一分間を刻んだ秒針
1－1　夢で会おう
1－2　一分間の友達
2　未来へ早送る秒針
2－1　過去となる女たち
2－2　飛び続ける鳥
3　過去へ巻き戻す秒針
3－1　空虚な現在
3－2　過去という夢
4　空回りする秒針
4－1　失われた自分
4－2　一分間だけの人生
終わりに

はじめに

ウォン・カーワァイ[1]は、1988年に監督デビューを果たし、今までに11本の映画[2]を作ってきた。その11本の作品は、すべて、彼自ら書いた脚本に基づくものである。彼の作品が好きな人は、個性的でどこか普通の人と違うキャラクターに魅了される場合が多い。逆に、彼の作品を嫌う人は、大概そのキャラクターを素直に理解することができない。理解の行き場を「変人」だからと結論付けた瞬間、彼の映画を受け入れられなくなる。

好かれようと嫌われようと、ウォン・カーワァイは、「変人」を一人また一人と作り上げてきた。雨など降っていないのに、ずっとレインコートを身に纏う女[3]。ブエノス

アイレスの貧しいアパートのくたびれたキッチンで、タンゴを踊る男二人[4]。彼らは、時には比喩に満ちた、詩のような独白をする[5]。

ウォン・カーワァイの映画を理解するには、まずこの「変人」のような人物たちの理解から始めなければならない。それでは、今までの先行研究で、これらの人物像が明らかにされたのだろうか。結論を言えば不十分である。風変わりな人物たちに共通する特徴を、返還を目前に控えた香港人の不安や焦燥感と結びつけ片付けられるのみであった。あくまでも「香港」という枠組みに拘泥して、ウォン・カーワァイの映画、人物像を理解しようとする傾向が見られる[6]。

本論は、「香港」という枠組みを取っ払って、彼の一つの作品に立脚して、その人物像を明らかにしたい。それによって、その主人公像が、その後のウォン・カーワァイ作品にどういった影響を与えたかを探りたい。そこで選んだ作品は、彼の映画に初めて「変人」が現われた作品、1990年の『欲望の翼』[7]である。

1988年のデビュー作『今すぐ抱きしめたい』では、主人公は他の香港映画にも見られる反逆的なヤクザの青年[8]であったのに対し、二年後の『欲望の翼』では、ほかの香港映画では見られない、ウォン・カーワァイ独特の「変人」が登場する。その変人である主人公を演じたのは、今ではもう故人となった[9]俳優レスリー・チャン（張国栄）である。

レスリー・チャンは、男・女、善・悪など、どちらともつかない雰囲気を併せ持つ役者である[10]。その独特な魅力をいち早く見抜いたのは、ウォン・カーワァイにほかならない[11]。『欲望の翼』でレスリー・チャンが演じたこの主人公は、時には「夢で俺に会える。」、「君のために、君と過ごした一分間を忘れない。」と、気障な口調で女性を惹き付ける。またある時は自分のことを「生まれた時から足を失い、死ぬまでずっと飛び続ける鳥。」と喩え、深刻な顔で独白する。

『欲望の翼』の原題である「阿飛正伝」の「阿飛（アーフェイ）」というのは、中国語で「遊び人の男」を意味し、「正伝（ジョンジュアン）」というのは、伝記の意味である。このことから、先行研究では、主人公が遊び人だと理解されている[12]。その一方、自由に憧れる60年代の青年の象徴だと指摘するものもある[13]。だが、管見のかぎり、ウォン・カーワァイは、人生をゲームのように遊んで送る「阿飛」や自由になりたい青年などではなく、過去の中で失った自分の本当の姿を捜し続ける人物像を描き出した、と筆者は考える。この人物像は、その後のウォン・カーワァイの作品にも貫かれている。過去で失った自分を探し続ける人物たちを通じて、ウォン・カーワァイは、香港返還を目前としている香港人の心理ではなく、移民者である自身のアイデンティティを問いかけつづけた。

1　一分間を刻んだ秒針

1－1　夢で会おう

場所と時間を説明する字幕もなく、映画の幕が開かれる。

シーン１　どこかの売店・一日目の午後

静かな廊下に響く足音の中、男の背中が見える。キャメラは、廊下を貫き彼の背中を追う。

男は、廊下の突き当たりを右に曲がり、そこにある売店で足を停める。コーラを冷蔵庫から取り出した男は、カウンターに置いて店員の女に値段を聞く。

「20セント、ビンを持って帰るならプラス５セント。」

壁にぶら下がった時計からは、秒針のチクタクという音が響き、針は三時に近づいていく。

映画は、前進する男の背中から始まる。何故か、彼の足音に時計のチクタクという音が被せられている。彼がやってきた、この廊下の突き当たりにある売店。ここがどこなのか、説明は何もない。男が持っているスポーツバックから、ここが体育館だと推測できる以外何も分からない。

この静かな売店､客は日にそれほど多くなさそうだ。男にコーラの値段を聞かれた時、店員の女は、機械的に答えた。彼女はこの売店の唯一の店員である。その答え方から、彼女の仕事の退屈さと寂しさが伺える。それを男は見破ったように、彼女に近づいていく。

金を渡した男は、タバコを片手に「…君の名前はなんていうの？」

女「(レジから小銭を取り出して) …何で教えないといけないの？」

つり銭を男に返し、彼をほうってカウンターから出ていく。女は、客たちが置いて帰ったコーラの空き瓶を拾ってケースに入れる。

名前を聞かれてから、女は、少しだけ間を置いて返事をした。やや意外に感じたのであろう。今まで客に名前を聞かれたことはなかったのかもしれない。一瞬迷った女は、やはり男に名前を教えなかった。自分のプライベートを、客である男に知られたくないのであろう。彼女にとって、男との関係は、ただの客と店員の関係に過ぎない。だが、次の瞬間、二人の関係は思わぬ方向へと転んでいく。「君の名前を知っている。」と男が

言う。

男「君の名前は、スー・リーチェンだろう。」
　びくっとした女は男に近づいていく。
女「誰から聞いたの？」
男「…今晩、夢でわたしに会える。」
　彼女の耳元に呟いて立ち去る。
　立ち去る男、見送る女。

「君の名前は、スー・リーチェンだ。」と当てられた瞬間、女は驚きを隠せなかった。名前を誰かに知られているということが、彼女にとって、そんなにも驚くことなのだろうか。彼女の動揺を見破った男は、気障にも「今晩、夢でわたしに会える。」と言い残して、先を急ぐようにさっさと立ち去っていく。彼がこの店にやってきてから、まだ一分半も経っていない。

男の後姿に問いかけるように見送るスー。名前を当てられたことで、彼女の心には波紋が広がっている。この男、彼女にとってほかの客とは違うようだ。

見送るスーの姿に、ラテン音楽[14]が流れてきて、次のシーンに切替えられる。

シーン２　熱帯雨林・昼間
　緩やかなラテン音楽とともに、椰子の木が生い茂る熱帯雨林の映像が、ゆったりと画面の右から左へ流れていく。熱帯雨林を背景に「阿飛正伝」というタイトルがくっきりと現れる。

はじめにで触れたように、映画のタイトル「阿飛正伝」は、「遊び人の生涯」と理解することが出来る。シーン１で登場した男の名前はまだ説明されていない。このタイトルを通じて、ウォン・カーワァイは、まるで男の名前を「阿飛」だと名づけているようだ。だが、タイトルの背景となる、熱帯雨林の映像とラテン音楽は、シーン１の売店との関連性が見当たらない。

ウォン・カーワァイは、何故タイトルの背景に、熱帯雨林とラテン音楽を用いたのだろうか[15]。今のところ、熱帯雨林とラテン音楽は、この阿飛である男の生涯となんらかの関係を持っていることしか推測できない。

熱帯雨林の映像が消えると、映画は翌日の売店となる。

シーン 3　体育館の売店・二日目の午後

スーは、カウンターに頬杖をついて、うたた寝をしている。三時五分前、あくびをする彼女の元に、男がまたやってくる。相変わらず、時計の音が響いている。

スーは、男の視線を避けるように、長い髪の毛で顔を隠している。コーラ瓶をカウンターにおいて、男はスーの顔を覗き込む。釣りを返すスーは、思い切ったように、「夕べ、夢であなたに会わなかったわ。」と男に言う。

男はスーの顔をじっと見てから、「君は寝てなかっただろう。何をしても無駄だよ。必ず夢で会える。」と言い残して立ち去る。

今日のスーは、やつれた顔で、うたた寝をしたり、あくびをしたりしている。男に見破られたように、スーは昨夜寝ていなかっただろう。それは何故だろうか。男の「今晩、夢でわたしに会える。」という冗談のような言葉を本気にとり、夢で男に会うことを恐れて眠れなかったのだろうか。まさかそんな戯言を本気に取るわけがなかろう。理由は一つ。名前を当てられたことで、彼女の心の中に何かが巻き起こり、心の平静を失ったからだ。だが、その心の中の何かは、今の時点ではまだ謎である。

昨日、男が来たとき、スーは彼を普通の客のように扱っていたが、今日は違っている。男の視線を避ける彼女は緊張している。スーにとって、この男はただの客ではない。何故なら、男はほかの客と違って彼女の名前を知っているからだ。スーは、昨日男の言った冗談に対して、挑発的に言い返した。「夕べ、夢であなたに会わなかったわ。」と。男はスーの挑発に乗って、夢で会える云々の冗談で突き返す。「必ず夢で会える。」と。そして、男はまた先を急ぐように立ち去っていく。今日、彼はこの売店に一分間も居なかった。

男が帰った後、スーはカウンター越しにうとうとと眠気に誘われる。

シーン 4　体育館の売店

時計が午後四時を指し示す時、スーはカウンターに顔を伏せ、目を閉じている。寝顔には微笑みが浮かび、熱帯雨林の映像の時と同じラテン音楽が遠くから響いてくる。

スーはまるで心地よい夢でも見ているようだ。ウォン・カーワァイは、スーがどんな夢を見ているかは見せてくれないが、彼女の夢から響いてくるかのような音楽を聞かせてくれた。この音楽はタイトルのシーンで、熱帯雨林の映像とともに使用されていたラ

テン音楽の曲である。このことから、スーが見ている夢は、熱帯雨林の風景だと推測することができよう。

では、スーの微笑は、どういう意味を持つのだろうか。男と出会い二日目の今、スーは男をただの客と思えなくなった。彼女にとって、既に男は特別な人となっている。夢の熱帯雨林の風景で、スーは、男に会えたから微笑んだのではないだろうか。もしそうであれば、「夢で会える」という男の言葉は、冗談などではなく、見事な予言ということになる。

二人の関係は、「あなたの名前はスー・リーチェンだ。」という、男の一言に始まった。彼と出会った二日目には、ただの客と店員の関係を超え、夢で会える者同士という不思議な関係になった。自分の名前を男に知られることは、スーにとって、どういう意味を持つのか。また、二人が何故夢で会えたのか。それらのことは映画の最後で、熱帯雨林の映像が再び現われる時、明らかとなる。

１－２　一分間の友達

二人が夢で「会えた」翌日、男はまたやってくる。

シーン５　体育館の売店・三日目の午後

キャメラは彼が相変わらず、廊下を貫き男の背中を追いかける。彼の足音と時計の音もいつものように聞こえる。彼が売店の入り口に足を止めた時、カウンターの中でスーは背を向けて棚に並んでいるビンを拭いている。

男「今日はいつもと違うね。」

ちらっと男を見て、「何も違わないよ。」と、スーは、カウンターに置いてあるビンを拭く。

男「じゃ、何で耳が赤くなっているの？」

スー、思い切って「一体何がしたいの？」と男に近づく。

男「友達になりたいのさ。」

昨日のスーと比べて、今日のスーは、男が現れた時からそわそわしている。スーは、男の存在を明らかに気にしている。彼女は夢で男に会えたのであろう。このことで、彼女は、少し男に特別な感情を抱き始めたのではないか。それにもかかわらず、スーは認めたくなかった。男は、先に「友達になりたい。」と、スーに打ち明ける。

スー「何であなたと友達にならないといけないの？」

男「…一分間だけ俺の時計を見つめて。」

スー「どうしてあなたの時計を見ないといけないの？」

男「一分間だけさ。」

キャメラは二人に近寄る。お互いの呼吸が聞こえる中、二人は時計を見つめる。

円形の時計がスクリーンいっぱいに映し出される。その秒針は、チクタクという音をたてながら、一秒一秒と3時に向かって進行している。その音が画面いっぱいに漲る。

どうして友達にならなければいけないのかと、スーに聞かれた男。その答えの代わりに彼は、一分間だけ時計を見てと、スーに頼んだ。

二人が見つめている時計のアップは、一見売店にかけてある時計に見えるが、そうではない。今までの売店の時計のショットには、午後三時の日差しによる、時計本体の陰影や、近くにある旗の陰影などが映されていたが、この時計のアップには、陰影がまったく映されていない。したがって、この時計は、この売店に掛けている、物理的な時計ではない。時計が物理的なものでなければ、その秒針が刻んだ一分間も時間の長さという一般的な一分間ではなかろう。

一分間が過ぎた後、

スー「過ぎたよ。それで？」

男「今日は何日？」

スー「16。」

男「16か…1960年 4 月16日午後3時前の一分間。あなたは、わたしと一緒にいる。あなたのために、わたしは、これからもこの一分間を覚えている。これから、わたしたちは一分間の友達だ。これは事実で、あなたは、否定することができない。何故なら、すでに過ぎ去ったから。」

何故友達にならなければいけないのかという、スーの質問に対して、男は、一分間時計を見つめてとスーに頼んだ。一分間が過ぎた今、その質問に答える必要は、もうなくなっている。何故なら、男いわく二人は、すでに友達になったからである。

「これから、わたしたちは一分間の友達だ。これは事実で、あなたは、否定することができない。何故なら、すでに過ぎ去ったから。」すでに過ぎ去った過去で、二人が一

分間の友達になった。スーは、その一分間の過去を否定することができないと、男が言う。男は、スーに、「過去は否定できないものだ。」と、知らしめしている。

男の言う友達はどういう意味を持つのだろうか。「1960年 4 月16日午後 3 時前の一分間、あなたは、わたしと一緒に居る。」と男が言った。彼の言う「友達」とは、一緒に居るもの同士のことである。

この男の台詞で、二つのキーワードが提起されている。一つは「過去」で、もう一つは「友達」である。

男が立ち去った後、小売店から出てきたスーはドアに凭れ、立ち去った男の後姿を見送る。スーのモノローグが聞こえる。

> 「わたしのために彼がこの一分間を覚えてくれているかどうか、わたしは知らないが、私はずっと彼を忘れずに居た。それから、彼は毎日に来ていた。わたしたちは一分間の友達から、二分間の友達へ、そして毎日少なくても一時間も一緒に過ごしていた。」

スーのモノローグによって、ここまでの五つのシーンが締めくくられ、さらに二人がすでに付き合いだしているシーン 6 へと繋がっていく。そのモノローグが過去形となっていることから、映画の開巻から今までのシーンは、すべてスーの回想だと理解することができる。その回想で、スーは、「過去の一分間」が、どうのように起こったのかを振り返っている。ということは、彼女は「一分間の過去」も「一分間の友達」もずっと覚えている。だが、男がその「一分間の過去」を覚えているかどうかは、スーには分からない。

映画の最後で、男は、ようやくその答えを打ち明ける。その時、非物理的な時計が刻んだ「一分間」の意味から「一分間の友達」の意味までが明らかとなる。物語が進行するなか、男がその「一分間の過去」と「一分間の友達」であるスーを覚えているのか、ウォン・カーワァイは、問いかけつづける。

2　未来へ早送る秒針

2－1　過去となる女たち

スーのモノローグが終わり、次のシーンになると、すでに付き合いだした二人が映される。

シーン 6　男の部屋

ベッドの上に横たわる二人の横顔のアップが映される。

スー「知り合ってどれぐらい経つだろう？」

男「長いね。覚えていない。」

シーン 5 で男は、スーと過ごした「一分間」をずっと覚えるといった。それにも関わらずシーン 6 早々、彼はスーと付き合ってきた日日をもう忘れている。その一分間も、付き合ってきた日々も同じ過去である。男はその「一分間の過去」を忘れたのではないか。そもそも、その一分間の約束は、スーを口説くための綺麗事だったのかもしれない。

その後の二人の会話で、スーが同居する従姉が結婚するから、従妹の家から出なければならないと男に伝え、彼のところに引っ越してきたいと打ち明ける。それに対して、男は「良いよ」と言ってくれた。スーは更に自分と結婚する気があるかどうかと男に聞くが、男に「ない」とずばりと断られる。スーはもう二度と来ないと言い残し、男のもとを立ち去る。

従姉が結婚する、それに伴って、スーは従姉の家に住めなくなる。スーは、男と結婚して、自分の落ち着く先を求めたが、男に断られてしまった。男が自分の落ち着く先を与えてくれないと見極めたスーは、男との関係を断念する。このシーンにおける特徴は、対極的な二人の位置関係と、明と暗に色分けされた二人の横顔の構図。会話しながら交わることのない互いの視線は、二人の思いが交差せず、離れていくことを暗示している。だが、スーは何故親ではなく、従姉と同居しているのだろうか。また、男と結婚したい理由は、どうも従姉の結婚に影響されているようにも見える。それらのことは、その後の映画でスーの身の上のことが描写されてから明らかとなる。

男と別れた後、閉店後の売店にいるスーのシーンがあった。そのシーンでは、かつて男が現われてくる廊下の電気が消え、暗くなっている。その暗くなった廊下は、男がもう売店に現われないということを暗示している。男がスーに一緒に過ごした一分間を忘れないと約束してから、映画は3分しか経過していない。男はもう一分間の友達を忘れたのだろうか。

スーと別れてすぐに、男は、ダンサーのルルと知り合い、一夜を共にする[16]。その時、私たちは、ようやく彼の名前が「ヨディ」だと知る。ヨディとひと時を過ごしたルルは、帰る前に自分の電話番号を、マッチ箱の裏に書いてヨディに渡す。その電話番号をめぐって、知り合ったばかりの二人は不愉快になる。

シーン18　ヨディの部屋・深夜

「わたしの電話番号を覚えようともしない。」

と、ルルがヨディを責める。

「覚えなくたって、ここに書いてあるじゃないか。」

と反論するヨディ。

「無くしたら？」、ルルが詰め寄る。

「電話番号を無くせるなら、人も同じように無くせるさ。」と、ヨディがあっさりと答える。

ヨディは、一夜を共にしたばかりのルルに、もう冷たい言葉を吐いた。「電話番号を無くせるなら、人も同じように無くせるさ。」と。ヨディは、自分にとって、ルルを忘れることは、彼女の電話番号を無くすのと変わらぬほど簡単なことだといっている。彼は、そんなにも付き合った女を簡単に忘れるのだろうか。そのことをウォン・カーワァイは、次のシーンでヨディの内面を浮き彫りにしようとしている。

ヨディを忘れられないスーは、再びヨディを尋ねてきて、結婚しなくても良いから、そばに居たいと彼にいう。その二人の会話を盗み聞きする人が居る。ヨディと付き合いだしたルルである。ヨディに断られた後、スーは彼にこう聞く。

シーン29　ヨディのマンションの廊下

ヨディの横顔は画面の右側の手前に、スーの正面バストショットは左側の奥に。

スー「わたしのことが好きだった？」

廊下の隅っこに隠れて、二人の会話を聞いているルルの背中。ヨディの答えが聞こえる。

「これから、どれだけの女を好きになるか、自分でも分からない。最後にならないと、誰が一番好きなのか分からない。」

ルルがキャメラに向かって振り返る。その顔に不安げな表情を隠せない。

画面の左奥に置かれたスーは、ヨディと別れたシーンと同じように、相変わらず画面の奥の影に落とされている。彼女はすでにヨディの過去となったのだろうか。「わたしのことが好きだった？」と、スーはヨディとの過去を穿り返そうとしている。だが、ヨディは過去を振り返らずに、これからのことを語りだす。「これからどれだけの女を好きになるか、自分でも分からない。」と。ヨディが答える時、キャメラは、盗み聞きをするルルの背中を映し出す。ヨディの答えは、スーだけではなく、ルル対する答えのようにも聞こえる。彼はルルがそこに隠れている事に気づいたのだろうか。ヨディは、これからも違う女を好きになってゆくと言っている。つまり、ヨディは常に先へ進んでいって、どの女も彼を止めることができない。

「最後にならないと、誰が一番好きなのか分からない。」とヨディが最後に言った。ヨディは、人生の最後にならないと、決して過去を振り返らないと主張している。スーと一分間の約束をした時、ヨディの台詞に、すでに「過去」というキーワードが提起されていた。ヨディは、過去が取り消せないものだといっていた。ここで、彼の過去に対する見方が再び現れている。その見方はスーがヨディを尋ねてきた前のシーンで、すでに描き出されていた。少しさかのぼって、そのシーンを見よう。

2－2　飛び続ける鳥

ルルと一夜を過ごした翌日。ルルが帰った後、ヨディは、この映画ではじめて一人となる。その彼が一人となるシーンを見よう。

シーン22　ヨディの部屋・朝

チクタクという時計の音の中、ヨディはマッチでタバコに火を付け、マッチ箱をテーブルに置く。タバコの煙とともに、ヨディは大きな溜息を吐き出し、胸元を掻く。その時、マッチ箱にルルの電話番号が書かれていたことを思い出し、再びそれを手にとって見る。彼のモノローグが始まる。

「脚のない鳥がいると聞いたことがある。その鳥は、ずっと飛び続けるしかできない。」

ヨディはマッチ箱をテーブルの横の隅っこに投げ捨ててしまう。背筋を伸ばして二つ目の溜息を漏らす。

ベッドに横たわるヨディは、やる気を起こせずにいた。重力に委ねる体にも、タバコの煙を含んだ溜息にも、ヨディの気だるさが溢れている。その姿はまるで何かの重荷を

背負っているようだ。この重荷は何なのだろうか。

気だるいヨディの手にルルが電話番号を書き残したマッチ箱があった。先ほどみたように、ルルが帰る前、ヨディは「電話番号を無くせるなら、人も同じように無くせるさ。」と、彼女に言い捨てた。電話番号は、ルルの存在を象徴するものである。手元に残ったその電話番号を目にした時、ヨディは、ルルや、彼女と過ごした一夜を振り返る。このことが彼にとって重荷であり、気だるさを感じずに居られないのだろう。だから、ヨディはそれを投げ捨てたのではなかろうか。ヨディのモノローグが続いていく。

「疲れた時、風の中で眠る。この鳥は一生に一度しか着陸できない。」

ヨディのモノローグが終わった時、彼はすでにベッドから降り、レコードをかけ、鏡の前に立って自分の姿を見つめている。

「そのときは鳥の死ぬ時だ。」

ザビア・クガートのラテンナンバー[17]が流れてきて、ヨディは、鏡の中に映される自分を見つめながら、リズムに合わせて体を躍らせる。音楽とダンスに陶酔するヨディは、まるで違う世界に入っているようだ。

マッチ箱を投げ捨てたことで、ルルの存在を表すその電話番号を視野から消しさり、ルルも、そして彼女と過ごした一夜の記憶も消しさることができた。過ぎ去った過去は取り消せないとヨディが言った。だが、その取り消せない過去を振り返ることは、ヨディにとって重荷である。それを忘れることで、彼は重荷から解放される。過ぎ去った過去は取り消すことはできないが、記憶は消えてゆくもの。ヨディは過去の記憶を取り消していく。ベッドから降りたヨディは、ダンスをしだし、さっきまでの気だるさはどこかに飛んでいってしまう。重荷から解放されたヨディは、まるで夢見心地のようになる。

ヨディのモノローグでは、生まれた時からずっと飛び続ける足のない鳥の話をしている。そのモノローグの終わった直後に、彼は、鏡の中に映されている自分の姿を眺めていた。ヨディは、飛び続けている鳥の姿を通して、自らの姿を見つめているのであろう。ヨディは、自分をその飛び続けている鳥だと喩えている。

ここで、ウォン・カーワァイは、「阿飛正伝」の「飛」の字に、二番目の意味をくっきりと浮かび上がらせている。それは、「飛ぶ」という動詞の持つ比喩的な意味である。だが「飛び続けている」ということは、ヨディの何を表しているのだろうか。

このシーンでラテン音楽が流れてくるまでに、時計のチクタクという音がヨディの飛び続ける鳥のモノローグ背後に被せられていた。そのことは、私たちにヨディの登場す

る場面を思い起こさせる。ここで、これまでのチクタクという時計の音について振り返ってみたい。

ヨディがスーの売店にやってくる三つのシーンで、終始秒針の音が聞こえていた。その音の中、バックを担いでいるヨディは、スーの下にやって来て、すぐにスーの売店を後にどこかへ去っていく。秒針の音は、まるでヨディを先へ先へと急がせているように聞こえる。映画の開巻で、ヨディは先を目指す旅人のように暗示されていた。

ヨディがルルに「電話番号を無くせるなら、人も同じように無くせるさ。」といったシーンにも、時計のチクタクという音が終始聞こえていた。その音もヨディがいずれルルも忘れ、先へ進んで行くことを暗示しているに違いない。これらの秒針の音は、一秒一秒と未来へと早足で進んでいく、ヨディの自分に対する掛け声なのであろう。

今までの映画では、ヨディの登場からキャメラが何度も前に進む彼の背中を追っていた。ヨディがスーの売店にやってくるシーン、ヨディが養母のマンションにやってくるシーンなど。また、ヨディがスーの売店にやってくる三つのシーンのうち二つのシーンは、彼の立ち去る姿を見送るスーのカットで終わっている。彼がルルの仕事先を立ち去る時も、その後姿をルルに見送られていた。それらの表現は、ヨディが常に先を急ぎ、先へと進んでいこうとする人であることを表した。

過去の記憶は、先へと進む重荷でしかない。それを綺麗さっぱり忘れて、さっさと先へ進めば良い。それがヨディの思う自分である。飛び続ける鳥を通じて、ヨディは、過去を振り返らず、先ばかり急ぐ自分の姿を見つめている。

「この鳥は一生に一度しか着陸できない。そのときは鳥の死ぬ時だ。」と語るヨディ。それは、彼が死ぬまで自分の生き方を貫こうとする宣言にも聞こえる。音楽の中で、踊るヨディは、風の中で飛び続ける鳥のイメージを具現化した現われだ。だが、このシーンで、ヨディの自分に対する見方と乖離した、ウォン・カーワァイのヨディに対する見方が現われる。

ウォン・カーワァイは、ここで踊っているヨディの姿だけではなく、鏡に映っているヨディの姿も映している。鏡の中のヨディの姿は、幻像でしかない。見方を変えれば、それと同じように、未来へと飛び続ける鳥の姿も、ヨディの幻想にすぎないと、ウォン・カーワァイは暴き出している。どこか空ろな軽やかさを帯びたヨディのダンスする姿で、このシーンの幕は余韻を残し閉じられていく。

3　過去へ巻き戻す秒針

3－1　空虚な現在

ヨディのモノローグのシーンのあと、ヨディと母の会話で、彼の秘密が明らかにされる。ヨディの「母」は、実は彼の実の母ではなく、彼の養母である。彼女は、ヨディの実の母がどこにいるかをずっと秘密にしてきた。ヨディはそれを突き止めようとしている。

ヨディの養母がアメリカに移民する前に、ようやくヨディの実の母の居場所を彼に打ち明ける。それを機に、養母は今までヨディに言えなかったことを彼に語りだす。

「長い間教えてあげなかったわたしは、確かに悪かった。でも、それはあなたを守りたかったからよ。あなたの両親は最初からあなたを必要としなかった。もし必要とすれば随分以前に迎えに来てくれたはず。あなたには分からないだろう。私が何を言おうとしても、あなたは聞く耳を持たない。」

この場面は養母の正面、ヨディの横顔を捉えたワンカットで、1分40秒も撮影されていた。ヨディは、今まで養母の言うことに対して、いつも激しく口答えをしていたが、今は黙って養母の言うことを聞いている。

ヨディの実の親が、もし自分の息子を必要とすれば、疾うの昔に迎えに来てくれたはずである。そもそも、彼らは最初からヨディを必要としなかった。「あなたは捨てられた子。」それが養母の言わんとすることである。養母が今までヨディに親の居場所を隠してきたのは、ヨディが捨てられたという過去を打ち明けたくなかったからだろう。それにもかかわらず、ヨディは自分の知らない過去を穿り返そうとしている。だが、ヨディは過去を振り返らずに、先へ進もうとしているのではないのか。

このシーンで、鏡が再び画面に現われる。左端っこのヨディと対角線の画面の右上にヨディの鏡像がぼんやりと映されている。ウォン・カーワァイは、ヨディの幻像を再び浮かび上がらせ、過去を振り返らず、先へ前進する鳥は、ヨディの幻想にすぎないと表している。

過去に対するヨディの姿勢には、矛盾が現われている。その矛盾にいち早く気づいたのは彼の養母である。彼女は、それを次のように暴き出す。

「あなたは飛びたいだろう。さっさと飛べば、ただ、飛ぶなら遠くまで飛びなさい。あなたが自分で自分を騙していたことを、私は聞きたくないから。」

「飛ぶ」という言葉を養母は、ヨディの生き方にぶつけていく。過去を振り返らずに先へと進もうとするヨディ。今、彼は、逆に自分の知らない過去を探そうとしている。「そんなあなたは、自分で自分を騙しているだけ。」と、養母が指摘した。ヨディはまだ気づかずにいるが、彼の矛盾が次のシーンでより明らかとされる。

シーン42　養母のマンション

時計のチクタクという音が響き渡る中、キャメラは、テーブルに置かれている時計からテーブルの上に散乱している手紙へ、そして、その前に座っているヨディにパンしていく。ヨディは一枚の手紙を読み終わったら、もう一枚を手に取る。

色あせた封筒と封筒の船の柄は、それらの手紙がヨディの親が海外から送ってきたものだと分かる。手紙を読んでいるヨディは、手紙の中で、自分の知らない過去を探ろうとしている。そんな彼の姿に秒針の音が被せられた。その秒針の音は、急に狂いだしたかのように、未来へと進むことをやめ、過去へ戻っていく。その狂った秒針の運動の中で、ヨディは未来と過去の間で引き裂かれている。

しかし、未来と過去の間で引き裂かれているのは、ヨディだけではない。香港に住む上海からの移民もそうである。彼の養母もそうだった。養母がアメリカに移民することをヨディに教えるシーンで、鏡に映っている彼女の姿が映し出されている。そのカットで、キャメラはガラス越しに、鏡を見ている養母の姿を捉える。合わせ鏡に映されている二つの像だけではなく、ガラス越しの彼女の背中もぼんやりとしている。彼女の姿は、まるで幻影のようで、現実味を失っている。その幻影のような姿は、何を表しているのだろうか。その答えがヨディとの別れのシーンで、徹底的に描き出されている。

最初に映された養母の姿は、テラスで海の向こうを眺める背中だが、途中で、キャメラに振り向いて、顔をキャメラに向ける。この体が向いている海の向こうは、アメリカへの旅立ちという未来が広がっている[18]。顔が向いている部屋の奥は、上海時代の写真に記録された過去が留められている[19]。彼女は、どちらにも位置せずに、この真ん中のテラスに身を置かれている。それは彼女の現在という位置づけであろう。現在で、彼女は未来に進もうとするが、過去を忘れられず振り返る。彼女が位置するテラスは、画面に映されず、彼女の姿と、その背後には夕焼けに染まった空だけ広がっている。彼女はまるで足の踏み場を持たないように宙吊りにされていた。過去と未来に引き裂かれた彼女は、現在という足の踏み場を失っている。洗面所のシーンで、映された彼女の幻影の

ような姿は、彼女の空虚な現在を表している。

その空虚な現在は、ウォン・カーワァイは、すでにヨディのダンスするシーンで、鏡に映されているヨディの虚像や、空ろな軽やかさを帯びたヨディのダンスする姿を通じて描き出していた。ヨディも養母も、空虚な現在に、飛び続ける鳥であろう。この二人と平行して、ウォン・カーワァイは、もう一人の飛び続ける鳥を描き出している。それはスーである。

ヨディと別れた後のスーを描くために、ウォン・カーワァイは、一人の新しい人物を登場させ、彼をスーに近づかせていく。その人物はヨディのマンションの周辺を巡回する警官のタイドである。巡回中のタイドは、ヨディを忘れられずに徘徊するスーに出会い、やがてスーの悩みを聞く人となった。スーは、タイドにこう打ち明けていく。「家に帰りたいが、家はマカオにあって帰れない。長い夜、どこに行けば良いかも分からない。」と。

スーはマカオの移民だった。タイドとの会話から彼女は高校を卒業してから香港に来たことが分かる。スーにとって、自分の家は香港ではなく、故郷のマカオである。ヨディとの別れは、彼女の郷愁を巻き起こしている。スーが本当に懐かしく感じているのは、別れたヨディなのか、それとも離れた故郷なのか。彼女の中で、ヨディへの思いと故郷への思いが重なっているようだ。

夜の香港の街を巡回するタイドに付いて、スーは、後ろも先も建物が一切見えない夜道を歩いている。路面電車がスーとすれ違い、反対方向へ走っていく。スーは振り返りそれを見る。マカオに住む幼い頃、香港では路面電車が走っていることを聞いて、香港に憧れていたと、タイドに打ち明ける。その話から、スーは、従姉を羨ましく思うと話をする。「従姉が良くできる人だ。香港の学校を卒業してすぐ外資の会社に入ったし、彼氏もやり手で、もうすぐ結婚する。」と。

スーの従姉の話を通して、高収入の仕事や良い結婚相手などの条件がそろえば、香港で安住できるという、彼女の考え方が伺える。だが、それは本当なのだろうか。香港は自分の家ではないと思っている限り、どんな物質的な条件を揃えても、スーはここで落ち着けないのではないか。香港で落ち着けないのは、彼女がいつまでもマカオの過去を忘れられないからであろう。

3－2　過去という夢

フィリピンにやってきたヨディの初めての登場は、母の家から立ち去る後姿からである。ヨディが母に会いにやってきたにもかかわらず、ウォン・カーワァイは、わたしたちに、彼が母の家を訪ねてくる場面ではなく、彼が母の家を「立ち去る」場面を見せた。

シーン55　どこかの部屋の中

キャメラは、天使の銅像からパンして、その銅像と連体している豪奢な時計が画面に入ると、キャメラは止まる。チクタクという音をたてながら、秒針が進行している。午後四時半前。

シーン56　広大な屋敷の遠景

ヨディが早足で歩いている。彼のモノローグが始まる。

「1961年4月12日。わたしはようやく母の家にやってきたが、母は会ってくれなかった。」

シーン55で時計の秒針の音が聞こえた直後に、ヨディの足早に前へ進んでいく後姿の遠景が映される。今の彼は、どこかへ進むのではなく、母の家から立ち去ろうとしている。母に会うことができなかった彼は、断念したように、ここから立ち去ろうとしている。

シーン57　部屋の中

キャメラは部屋の壁にぶら下げている油絵の肖像画から高貴な雰囲気を持つ婦人にパンしていく。彼女は、肖像画の中の女性と同じくショールを肩にかけている。

ヨディのモノローグ「彼女はもうここに住んでいないと、使用人にいわれた…帰る時、後ろから誰かに見られている気がしたが、振り向きはしなかった。」

女性は、ゆっくりと窓に近づき、外を眺めている。くっきりと光に浮かぶその横顔は西洋人の顔立ちである。

ヨディは、「母がもうここに住んでいない。」と使用人に言われても信じずに、母がここに住んでいて、窓から自分を見ていると、推測している。ヨディのモノローグが続く中、キャメラは、ヨディの母の肖像から、その肖像とよく似ている母の姿を映し出す。その母の姿は、ヨディの頭にある「母親像」から作り上げられたものではないか。実の母が

窓から自分を見ているということは、ヨディの想像にすぎない。ヨディの想像が作り出した「母親像」は、西洋人の顔つきを持つ母であった。その母親像は何を表しているのだろうか。

シーン58　椰子の木が生えている森の中の道

早足で立ち去るヨディの姿。ヨディの足音が聞こえる中、彼のモノローグが続く。

「わたしはただ一度彼女に会って、どんな姿なのかを見たかっただけだった。それでも、彼女はそのチャンスをくれなかった。だから、わたしも彼女にチャンスをやらない。」

一度だけ会いたい姿、一度だけ見たい姿。その姿は、自分の生まれたこの家にあるとヨディが信じてきた。だが、永遠にその姿には、会うことも見ることもできず、想像するほかできない。中国語では、人代名詞の「彼女」と指示代名詞の「それ」は、同じ発音のtaである。したがって、ヨディのいう「彼女」は、彼の母そのものではなく、「それ」つまり母親像を意味している。

自分は、一体どんな民族の何人なのか。また、どんな家の何という名前の子だったのか。それらのことは、母を通じてしか知ることができない。「母親像」というのは、自分の出生に対するヨディの想像であり、自分の出生とは、本来の自分の姿を表している。ヨディは、本来の自分を永遠に知ることができない。

ヨディが、過去を突き止めようとしてきたのは、自分の本来の姿を見つけたかったからであろう。このシーンでは終始ヨディの正面姿は映されず、背中しか映されない。その表現からは、彼の本来の姿の欠落が描き出されている。

ヨディの足音が消え、その姿に、ラテン音楽「Always In My Heart」が被せられ、ヨディの一歩一歩が音楽の強弱二拍子のリズムに合わされ、スローモーションにされている。

鳴り響いたそのラテン音楽は、映画のタイトルのシーンで、熱帯雨林の映像とともに一緒に流れていた音楽である。この椰子の木が生い茂る森は、タイトルの背景となっていた熱帯雨林ではないか。ようやく明らかになった熱帯雨林は、ヨディの生まれた家の敷地であった。

今、その熱帯雨林の音楽のリズムに合わせ、ヨディの歩く姿は、スローモーションにされている。43秒の間、ヨディは、重複された音楽の小節の中で、「歩く」という身体の運動を繰り返すばかりで、なかなかその敷地から立ち去ることができない。

その熱帯雨林の風景は、ヨディの過去を象徴しているのであろう。早く過去から離れようとするヨディは、逆にずっとその過去をさまよい、自分の本来の姿を探し続けていた。

だが、それを見つけることができず、過去からから抜け出すこともできない。

4　空回りする秒針

4－1　失われた自分

映画の終盤で、もう一人の人物がヨディの過去を持って、彼の前に立ちはだかる。彼はかつてスーの悩みを一晩聞いたタイドである。タイドが再び登場したのは、ヨディがフィリピンの母の家から立ち去った直後である。その時、タイドはすでに警官を辞め、船乗りとしてフィリピンに来ていた。中華街でタイドは、酒に酔いつぶれ、道端に倒れているヨディを見つけ、自分のホテルに連れ帰る。

香港でヨディと一度面識のあるタイドは、ヨディを覚えていた。彼は、ヨディが自分を覚えているかどうかを探ってみたが、ヨディは特に覚えているような反応をしなかった。このタイドとヨディの淡々とした会話のシーンが、長いワンカット[20]で撮影された。何しに来たかとか、いつ香港に帰るとか、さり気ない会話が展開するなか、緊張感は徐々に漲ってくる。その緊張感は、何を表しているのだろうか。
その会話シーンに続くシーンの最初で、そのヒントが与えられている。

シーン65　駅・昼間

軽快な打楽器のリズムの中、空中に浮かんでいるようなキャメラは、一定のスピードに乗り、一台の馬車の後ろを追いかけるように、滑らかに前方に進む。駅の入り口に近づいたら、駅員がそこに野宿している乞食を追い出そうとする。
駅員「Get out of here! Go! Get out of here! Go! Go!」と、大声で叫んでいる。

軽快なリズムの中で、駅員の台詞は「出て行け！行け！出て行け！行け！」と叫んでいる。その声は、先のタイドと会話するシーンのヨディの内面の叫びではないか。ヨディは一箇所に長く居たらほかのところに行きたくなると言った。ヨディは一分も一秒も早く「ここ」から出ようとしているのであろう。「ここ」とは、フィリピンでも、この地

球上にあるどこでもなく、ヨディが忘れよう、忘れようとしてきた「過去」である。ヨディは、タイドを覚えていたに違いない。それでも、彼はすべての過去を断ち切って、再び先を目指そうとしていた。

だが、ヨディは、地球上のどこに逃げても、自分の中にある過去から逃げ出すことは出来ない。今、ヨディは、過去に呑み込まれそうになって、どうしようもなくなっている。再び、駅のシーンに戻ろう。

> キャメラは駅の入り口から駅の中に入り、一気に階段を駆け上り、ホールを通り抜け、広々としたレストランに直入する。
>
> キャメラの前方にジュークボックスで曲をかけたヨディがいる。ヨディがテーブルに向かって歩きながら、音楽のリズムに乗せて体を揺らがせる。

キャメラの移動は、まるで駅の中に飛んで入る鳥のようである。ヨディが独白した鳥が、キャメラの移動によって再現されている。キャメラの前にヨディの姿が現われた瞬間、わたしたちは、この鳥が飛んできた道は、ヨディが歩いてきた道であることが分かる。ヨディは、飛び続ける鳥だと、再び描き出されている。

浮き上がってゆらゆらするキャメラの移動は、鳥の不安定な飛翔を描き出し、現在という足の踏み場を失ったヨディの空ろな姿を浮き彫りにした。ここで、ヨディは再び踊りだす。その踊る姿は、相変わらず空ろな軽やかさを帯びていた。彼は、まるで空虚な夢を見ているようである。その空虚な夢は、彼の「現在」なのであろう。

その後、ヨディは、アメリカ行きの偽造パスポートを手に入るために、フィリピンのヤクザの男を刺してしまう。ヨディがヤクザと駅のトイレで取引をするシーンで、ヨディの姿を映さず、鏡に映された彼の姿だけが画面に現われる。過去の中で、本当の自分の姿を見つけられなかったヨディは、空ろな抜け殻となっていることが表されている。

ヤクザを刺したことで、ヨディは大勢のヤクザたちに囲まれ、殺される寸前となる。危機一髪のとき、タイドが助っ人に出てくれたおかげで、助かることができた。二人は駅の窓から逃げ出し、走っている汽車に飛び込む。汽車で二人は、通路を挟んで、斜めに向かい合う席に座る。タイドは、自分まで危険に巻き込んだヨディの無茶なやり方を責めるが、ヨディはタイドが勝手に付いてきたと言い返す。身勝手なヨディに対して、タイドの不満が抑えきれなくなる。ヨディが足のない鳥の話を切り出した時、タイドは、爆発したようにヨディを罵倒する。

「お前は鳥のつもりか？お前のどこが鳥なの？
お前は中華街のゴミ箱から拾ってきた酔っ払いだ。」

このシーンで、キャメラは少し斜めの俯瞰ショットで、通路を挟んで斜めに向かい合って座る二人を、画面の同じ高さに位置させている。その構図で、二人は視線をまっすぐに向き合わせている。今までの映画で、ヨディがほかの登場人物とまっすぐに視線が向き合って会話する場面はなかった。このシーンで、ヨディがはじめてタイドと正面に向き合って会話する。その構図は、タイドの言葉が今までにないように、まっすぐにヨディにぶつかって行くことを表している。

「お前は鳥なんかじゃない。ただの酔っ払いだ。」とタイドがヨディの正体を暴く。ヨディは黙っていた。かつて、ヨディの母の言葉がまだわたしたちの耳に鮮明に残っている。「あなたは自分で自分を騙している。」と。過去を振り返らず先へばかり進んでいると思っていたヨディ。彼は、ただ自分を麻酔させ、自分で自分を騙していただけであった。彼は先へ進むどころか、過去に彷徨いつつ、現在への出口を見つけられずに空ろな人生を送ってきた。今になって、その過去に縛られ、身動きもできなくなっている。今、彼は、もはやその過去に呑み込まれ死を迎えようとしている。

タイド「飛べるもんなら、飛んでみろ！飛んで見せろ！」
ヨディ「チャンスがあればな。その時、腰を抜かすなよ。」

香港からフィリピンへ、フィリピンからアメリカへ。ヨディという鳥は、どこに飛んでいっても、自分の内側にある過去から「飛び出す」ことができない。この命が尽きるまで、鳥は、過去から抜け出せない。ヨディのいう「チャンス」とは、死ぬこと以外ほかにはない。

4－2　一分間だけの人生

タイドはヨディの言葉を冗談としか思っていなかった。そんなヨディを相手にせずに、タイドは、次の駅の到着時間を聞きに、車掌が居る隣の車両にやってくる。車掌は、12時間後だと答える。その時、彼の横を一人の男が通り抜け、ヨディの居る車両に入っていく。

シーン63　ヨディの居る車両

手持ちキャメラは、隣の車両に入った男の主観ショットを捉える。

通路を通りぬける彼の視線の先に、席に座るヨディが現れる。ヨディは、肘で窓の枠に寄りかかって眠っている。

ヨディの目の前に来た男は、鉄砲を出して、ヨディの腹部に向かって発砲する。撃たれたヨディは、腹部が赤色に染められる。

汽車の外、暗闇を照らす列車のランプ。汽笛の音と共に、二発目の鉄砲の音が響いてくる。

帰ってくるタイドの視線の先には、目をぽかんと開け、腹部を赤色に染めたヨディの姿があった。

殺し屋の現われ方と行動に、いくつかの不思議な箇所が見られる。まず、ヨディとタイドが駅から逃げ出すシーンで、二人が汽車に飛び込む描写はあったが、追っ手のヤクザたちがその汽車に飛び込む場面は無かった。つまり、ウォン・カーワァイは、ヨディとタイドがヤクザたちからうまく脱出したように表している。だが、殺し屋が不思議にもその列車に現われる。

殺し屋は、タイドがヨディの傍から居なくなるタイミングを予想できたかのように登場し、ヨディだけの命を狙う。彼が、もし駅のヤクザたちの仲間であれば、ヨディだけでなく、タイドも撃ったであろう。何故なら、斬りあいで素手のヨディと比べて、鉄砲を奪い取ったタイドが、より多くの仲間を負傷させたからである。したがって、彼は駅のヤクザではなかろう。

眠っている時に撃たれたヨディは、自分を撃った殺し屋の顔を知らない。また、ヨディ以外に、その車両には誰も居なかったため、殺し屋を目撃した者は居ない。ヨディを殺しに来た人物が誰なのか、証明する者が存在せず、謎となっている。

この神出鬼没で正体不明の殺し屋は、誰なのであろうか。彼は、何故ヨディを撃ったのだろうか。

再び、映画に立ち戻って、そのシーンに続く場面を見よう。戻ってきたタイドの視線の先に、撃たれたヨディが現われたとたんに、突如、シーンが変わる。

シーン64　ヨディが生まれた病院・ヨディが生まれた日

病院の二階のホール。ホールの真ん中の部分は、大きな円形状に開いていて、一階のホールが覗かれる。一人の女性が画面の右側に現れ、その円形にそって左側に向かって歩いていく。手持ちキャメラは、彼女の主観ショットを捉えていく。

その視野に、一階に立っている、若い時のヨディの養母の姿が現われる。養母のモノローグが始まる。

「病院から出た時、気持ちが楽になった。もうこれで生計を心配しなくて済んだ。毎月50ドルを貰える。」

生まれたばかりのヨディを抱いた看護婦が歩いてきて、待っている養母に、ヨディを渡す。その瞬間、二階の女性の足取りも停まる。

「この子が18歳になるまで。」

眠っているヨディを受け取る養母。感謝の表情をこめて、二階に居る女性を見上げる。病院から出て行く養母の姿が女性の視野から消えていく。

撃たれた後のヨディの行き絶え絶えの声が聞こえる。

「この人生の最後で何が見えるかを一番知りたい。」

ウォン・カーワァイは、ヨディが殺し屋に撃たれる場面を見せた直後に、生まれたばかりのヨディが養母に渡される過去に遡り、その過去を再現した。この二つのシーンはどういう関係を持つのだろうか。その問題を解く鍵が、映画のこのシーンだけでちらっと顔を見せた、病院の二階に居る女性である。

病院の二階に居る女性が誰なのかは、説明されていない。彼女の円形に沿って歩く運動は、時計の秒針と同じ進行方向を持っている。彼女が動き始めてから、しばらくして、看護婦が生まれたばかりのヨディを抱いて歩いてくる。一連の動きを時計に見立てたとすれば、彼女が動き始めた時が、ヨディがこの世に誕生した時だと推測することができる。だが、その秒針たる女性の足取りは、生まれたばかりのヨディが養母に渡される瞬間に停まってしまう。何故、秒針は停まったのだろうか。

先のシーンの殺し屋と同じように、二階の女性の主観ショットの焦点も、眠っているヨディであった。殺し屋とヨディが同じカットに入り込んだ時、殺し屋は、ヨディの腹部に向かって発砲する。二階の女性の手が一階の看護婦に抱かれているヨディと同じカットに現れたとき、ヨディが養母に渡される。養母のモノローグからわたしたちは、ヨディが二階の女性によって、捨てられたことが分かる。

「18年間、月々50ドル」という取り引きで、民族、血筋、家系などによって証明される、ヨディの持って生まれた本当の姿が消し去られる。そんなヨディは、まさしく生まれた時から足を切られ、本来の姿を失った「足のない鳥」である。汽車でヨディを撃った殺し屋の正体は、この二階に居る女性である。ヨディが「致命傷」を負ったのは、彼の生まれた時であった。ヨディが腹部を撃たれたことも、彼が母体から離れた時に、致命傷

を負っていることを暗示している。

致命傷を持って生まれたヨディは、生まれた時から命の時計が止まっていた。今まで何度も画面に響いていた秒針の音は、未来に進んでいくものでもなく、過去に戻すものでもなく、空回りするもので、「空」の音である。その「空」の音は、ヨディの本来の姿の「欠落」を象徴している。

自分の一生で死ぬ前に何が見えるかを一番知りたいと語るヨディ。死ぬ前の彼の目に映っているものは、例の熱帯雨林の映像である。

流れる熱帯雨林の映像に、ヨディのモノローグ。

「足のない鳥は生まれてからずっと飛び続けて、死ぬ時になって初めて着陸すると思っていた。実は彼はどこにも行かなかった。彼は最初から死んでいた。」

ヨディは鳥の姿を通じて、今までの人生を振り返る。この熱帯雨林の映像は、汽車の窓の外の風景というより、ヨディが歩んできた人生の風景であろう。その風景は、先行研究で指摘された「ユートピア」[21]でも「幻」[22]でもなく、ヨディが足早に立ち去ろうとした実家の敷地の熱帯雨林で、彼の過去を象徴している。過去を振り返らず、先へとばかり進もうとしていたヨディは、ずっと過去で、失った自分の本来の姿を捜し求めていた。その姿を見つけることもできず、彼は欠落した姿で、夢を見るような人生を送ってきた。

熱帯雨林の映像の最後で、ヨディはモノローグでこう語っている。

「最後まで誰が一番すきなのかを分からないといっていた。今、彼女は何をしているのかな。」

熱帯雨林の映像がフェード・アウトする。

今、ヨディが一番好きだった女性のことを思い出している。彼女は誰なのだろうか。先ほど分析したように、この熱帯雨林は、スーの夢でもあった。今ヨディが思い出したのはスーではないか。ヨディの心が読めたかのように、タイドは、彼にある質問をする。

「なぁ、1960年 4 月16日午後 3 時前の一分間、何をしていたかを覚えているか？」

ヨディ「彼女から聞いたのか」。

タイド「…もう忘れたと思ったけど…」

ヨディ「覚えているべきことは、ずっと覚えているさ。」

死を前にして、ヨディが思い出したのは、スーだけではなく、スーと過ごした一分間であろう。ヨディは、スーと同じように、その一分間を覚えている。ヨディにとって、その「覚えるべき」一分間は、どういう意味を持つのだろうか。再び、映画の開巻で描かれたスーとヨディの出会いを振り返ってみよう。

ヨディが現れた時、スーは彼をいつもの有り触れた客だと思っていた。だが、「君の名前はスー・リーチェンだろう。」と、ヨディに言われた瞬間、スーは変わった。高校を卒業した後、香港にやってきた彼女は、香港で知り合いもなく、彼女の名前を知っている人も少なかった。だが、男はまるで彼女の古き知人のように、彼女の名前を知っていた。「スー・リーチェン」という名前を耳にした瞬間、スーは、自分が今香港ではなく、故郷のマカオに居るような錯覚を感じたのではないか。スーの中に、マカオの過去が蘇った。その過去はやがてスーの夢にも現われる。それはスーの夢でありながらも、彼女の現実でもあった。そもそも、彼女はマカオの過去から離れることができなかった。ヨディも彼女と同じである。二人は、過去という共通の夢を見ていたから、過去という夢で会えた。

1960年4月16日午後3時前の一分間、二人は夢から目覚め、現実の中で会った。ヨディとスーは、お互いの呼吸が聞こえるぐらいに近寄って、時計を見つめていた。映し出された時計の秒針は、この映画で最も力強いチクタクという音をたてながら動いている。その音は、相手の呼吸の音や息の暖かさなどから感じ得る、相手の心臓の音であろう。

その一分間、スーが生きていることは、ヨディが証明できる。それと同時に、ヨディが生きていることを、スーが証明できる。お互いは相手を映しだす鏡となっていて、その鏡が生きているから、映された相手も生きている。相手が生きていることを証明することによって、自分が生きていることも証明される。それは、「一緒に居る」もの同士である、「友達」の意味。二人は紛れもなくその一分間を生きていた。その一分間だけを生きていた。

終わりに

映画の最後で、ルルとスーは、それぞれ別の場所で、人ごみの中に姿が現われる。ヨディを捜しにフィリピンにやって来たてルルは、大勢の客たちが行き逢う旅館に泊まる。その日の夜、香港の体育館で、スーはサッカーに賑わう観客のチケットの確認をしている。

この映画で、彼女たちの名前を知っているのは、ヨディだけであった[23]。人ごみの中

にあっても、彼女たちの名前を知る者はいない。その名前は、彼女たちの本来の姿を象徴しているのであろう。ヨディとの過去が過ぎ去ったとともに、彼女たちの本来の姿も消えてしまう。

映画のラストシーンで、今まで一度も登場していなかった人物が現われる。天井が低く、狭苦しい部屋の中、一人の男が身なりを整えている。鏡を見ながら、髪の毛を整え、自分の姿をチェックする。その姿はまるでヨディが蘇ったようだ。

ここは、どこで、彼は、誰なのだろうか。彼は鏡の中に映っている自分の姿を見つめるが、錆びた鏡は彼の姿をぼんやり映し、ほとんど見えない。彼は自分でも自分が誰なのかを知らないのではないだろうか。彼もまた過去で自分を見失った人であろう。時計の音が消え、ラテン音楽が終始奏でられているこの異様な部屋は、男の夢の中なのかもしれない。彼はその夢の中で過去に戻り、失われた自分を見つけようとしている。

『欲望の翼』の後、ウォン・カーワァイは『楽園の瑕』という映画に取り組んでいた。その映画の英語のタイトルは、『the Ash of Time』、時間の灰燼である。『欲望の翼』での空回りする秒針は消え、時間が止まっている「砂漠」が舞台となる。人物たちが砂漠に象徴された「過去」という夢に生きる。同じく1994年の『恋する惑星』のテーマ曲は「夢の中の人」であった。その映画にも過去という夢に生きつつ、目覚めることがない人たちが登場する。1995年の『天使の涙』には、登場人物たちは名前もなく、天使No××となっている。天使と名づけられた彼らは、夢に生きている人種であろう。1997年の『ブエノスアイレス』で、レスリー・チャンが「足のない鳥」のような主人公を演じる。彼は香港からブエノスアイレスに飛んできたが、過去から飛び出すことができなかった。ウォン・カーワァイが自ら『欲望の翼』の続編だと位置づけた、1998年の『花様年華』と2004年の『2046』。その両作品で、『欲望の翼』のラストシーンで登場する男が主役となって、彼が過去でどのように自分を失い、また、その過去でどのように自分を探し続けたかが描かれている。

ウォン・カーワァイは、どうして過去の夢に生きる人たちを作り続けてきたのだろうか。彼はかつて自分の映画創作が「自分の人生の経験から大いに影響を受けた。」と述べたことがある[24]。『欲望の翼』のヨディ、スー、養母と同じように、ウォン・カーワァイの故郷は香港ではない。彼は上海移民である。彼は自らの移民体験をこう語っている[25]。

「わたしの家は大家族でいとこまであわせると全部で30人ぐらいになるんです。私は兄弟の中では一番下で、祖母の家ではいとこも一緒にいました。それが香港には両親と私だけが移住しましたから、私の唯一の友人は母親だけになって、寂しくて

孤独でした。友達ができるようになったのは中学校に入ってからのことでした。まあ、そんなわけでわたし個人としては上海のほうがとても賑やかだったという印象でしたね。ですから、何でこんなところに連れられてきたんだろうなんて思っていました。」

故郷の上海は、賑やかだったが、引っ越してきた香港は、寂しくて孤独だった。「何でこんなところに連れられてきたんだろう。」と感じていたウォン・カーワァイ。彼の名前の発音でさえも、上海語の「ワン・ガウェイ」から広東語の「ウォン・カーワァイ」にかわった。「ワン・ガウェイ」という自分が、上海の過去とともに消えてしまうと、彼が感じたのではないか。ウォン・カーワァイは、香港返還を目前としている香港人の心理ではなく、移民者である自身のアイデンティティを問いかけている。

その問い方には、濃厚な郷愁が漂っている。それが最も顕著に現われたのは、2000年の『花様年華』。主人公の男女を不倫の恋に走らせたのは、配偶者の裏切りではなく、同じく望郷の念に駆られたからだと考えることができる[26]。ウォン・カーワァイと同じく、彼らも上海移民であった。

『欲望の翼』をはじめ、その後の彼の映画にも、ラテン音楽が頻繁に使われていた。もともとラテン音楽は、ラテンアメリカに移住したヨーロッパ移民たちが作り上げた音楽である。その旋律に移民者たちの郷愁が漂っている。また、そのラテン音楽は四十年代の上海とも関係を持っていると、ウォン・カーワァイが説明したことがある[27]。

「フィリピンはラテンとの関係が強い。中国が解放される前の上海には有名なフィリピン人の音楽家や演奏家が数多くいました。解放後、彼らは香港にやってきて、香港の音楽シーンを引っ張っていったのです。」

ラテン音楽は、1949年以前の上海の主流音楽であった。その上海の音楽は、50年代に上海の移民たちとともに、香港に移住し、それから、多くの上海移民の郷愁を癒したにちがいない。そして、今になっても、ウォン・カーワァイの映画の通奏低音となって、移民者である彼の郷愁を癒しつづける。

【注】

1　中国名：王家衛。1958年上海で誕生し、5歳の時、末っ子の彼だけが両親と香港に移住した。香港に移住した当初、広東語を喋れなかったため友達もできず、学校が

終わると毎日のように母親と一緒に映画館へ行き、映画を何本も見て過ごす日々だったという。1980年香港理工学院を卒業後、香港のテレビ局TVB社に入社、フィルム班の製作スタッフとなる。１年ほど監督の育成コースで学び、半年実習していたが、その後フィルム班の製作が中止となったため、映画界に転身する。1982年に『彩雲曲』で脚本デビューし、1988年の監督デビューを果たすまで、10数本の脚本を手掛けた。

2　1988年『今すぐ抱きしめたい』（原題『旺角卡門』）、1990年『欲望の翼』（原題『阿飛正伝』）、1994年『恋する惑星』（原題『重慶森林』）、『楽園の瑕』（原題『東邪西毒』）、1995年『天使の涙』（原題『堕落天使』）、1997『ブエノスアイレス』（原題『春光乍洩』）、2000年『花様年華』、2004年『2046』、2005年『エロス　ハンド』（原題『Eros Hand』）、2007年『マイ・ブルーベリー・ナイツ』（原題『My Blueberry Nights』）、2008年『楽園の瑕　最終版』。

3　1994年の『恋する惑星』（原題『重慶森林』）でブリジット・リン（林青霞）が演じた麻薬の運び屋。この映画で彼女はサングラスをかけ、金髪のカツラを被っていた。

4　1997年の『ブエノスアイレス』（原題『春光乍洩』）でレスリー・チャン（張国栄）が演じたウィンとトニー・レオン（梁朝偉）が演じたファイ。この映画で二人は恋人同士。

5　1994年の『恋する惑星』で俳優トニー・レオンが演じた警官は、干しているタオルから滴る水を見て、「あいつが泣いているのを見て嬉しかった。あいつはやはり感情の豊かなタオルだ。」と独白する。また、1998年の『花様年華』で同じくトニー・レオンが演じた新聞記者は、「昔、誰にも知られたくない秘密を持った人は、山にのぼり、木を見つけてそこに穴を彫る。その中に向かって秘密をささやいて、それから泥で蓋をする。そうすれば、その秘密は永遠に誰にも知られることが無い。」と語る。その台詞は、四年後年の『2046で、木村拓哉が演じる男によって繰り返される。彼らは、映画で本当に木の穴に秘密をつぶやいた。

6　中国語の文献では、たとえば、李道新「王家卫电影的精神走向及文化含义」『当代电影』2001年第3号、28－35。黄海洲「后现代主义与王家卫电影」『北京电影学院学报』2001年第3号、8－18。陈旭光「一种现代写意电影-论王家卫电影的写意性兼及中国电影的民族化与现代化问题」『当代电影』2001年第3号、36－41。日本語の文献では、たとえば、小倉エージ編集『Filmmakers14ウォン・カーワァイ　キネマムック・フィルムメーカーズ・期待の映像作家シリーズ』（株式会社キネマ旬報社、2001年３月発行）の中に収録された、北小路隆志の「王家衛的地理学 - 僕たちはどこからやっ

て来て、どこへ行こうとしているのか」の作家論や、松岡環の「燥状態の根無し草」、佐藤英補の「新時代を迎えようとする香港へのラブ・コール」などの作品論）

7　『欲望の翼』（原題『阿飛正伝』）はウォン・カーワァイの二番目の作品で、出世作とも言われる作品である。この作品で、ウォン・カーワァイは、初めてキャメラマンのクリストファー・ドイルと美術監督のウィリアム・チョンと組んで、その後もこのメンバーで作品を作り続けた。『欲望の翼』は、1990年ヴィスタインギアフィルム（影之傑製作有限公司）に製作され、脚本監督はウォン・カーワァイ（王家衛）、撮影はクリストファー・ドイル（杜可風）、美術はウィリアム・チョン（張叔平）、主演はレスリー・チャン（張国栄）、マギー・チャン（張曼玉）、アンディ・ラウ（劉徳華）、カリーナ・ラウ（劉家玲）、レベッカ・パン（潘迪華）、トニー・レオン（梁朝偉）。DVDは新生代影像会社1992年３月発売。

8　アンディ・ラウー（劉徳華）が演じたアンディ。

9　レスリー・チャンは2003年４月１日に香港のビルの24階から飛び降りて、47歳の人生を終わりに他界した。それまでの長年うつ病に悩まされていたと言われている。

10　その生涯において、同性愛の傾向を持つ京劇の女形や、変質な殺人者である警官など、内面が繊細かつ複雑な人物を数多く演じていた。

11　ウォンは一時引退したレスリーをカナダから香港に呼び戻して、自分の映画の初主演を説得した。『欲望の翼』を経てレスリー・チャンは、アイドルから演技派に転向し、自らの俳優生涯の新天地を打開した。それは、ウォンが『欲望の翼』でレスリーの独特な魅力と演技力を見出したことと大いに関係すると思われている。

12　李相「《阿飛正伝》：漂泊者的精神之旅」『中国電影分析』2007年１月、298－307。

13　陳墨「生命的呢喃――王家卫电影阅读阐释」『当代电影』2001年第３号、21－26。

14　Los Indios Tabajaras演奏した「Always In My Heart」という曲である。

15　ウォン・カーワァイのインタビューによれば、『欲望の翼』の音楽は、全部自分で選曲し、映像に合成したという。そのインタビューは、小倉エージ編集『Filmmakers14ウォン・カーワァイ　キネマムック・フィルムメーカーズ・期待の映像作家シリーズ』（株式会社キネマ旬報社、2001年３月発行、18－24頁）に掲載されている。

16　男がルルと知り合った経緯は以下のようである。スーと男が別れるシーンの後、閉店後の売店に居るスーのシーンが続く。スーのシーンを経て、男が再び登場する。上海とも関係を持っていると、ウォン・カーワァイが説明したことがある。別れ、ルル彼は、彼の母らしき女性のマンションに現れ、る。その旋律に、移民者たちの

郷愁が漂っている。また、そのラテン音楽は、四十年代の酒に酔いつぶれて洗面室に倒れている母をベッドに寝かせ、母が恋人に騙されたことを使用人から知る。母は彼を「ヨディ」と呼んだ。次のシーンで、ヨディは別の洗面室に現れ、「よくもお袋を騙したな。」とハンマーで若い男を殴りつけ、母のイヤリングを奪い返す。洗面室の外、その一部始終を見ていた、ダンサーのルルが居る。ここはどうやらルルの着替え室のようだ。ヨディは男から奪い返したイヤリングを餌に、ルルを自分のマンションに誘いこむ。

17　曲名はMaria Elenaである。

18　彼女はかつて上海の売れっ子ホステスであって、年をとった今、老後のために年配の男性をターゲットにしている。一人の男性に、アメリカ行きを誘われ、彼女はすぐに快諾した。上海から香港へ、香港からアメリカへ、彼女も常に先へ進もうとする人である。

19　60年代の香港に生活していても、彼女は、40年代の上海のファッションを保ち続けた。チャイナドレスを身にまとい、襟元にブローチやネックレスを、耳元にイヤリングを付けている。また、ルルとのシーンで広東語を喋った以外に、ヨディとのシーンで全部上海弁を喋っていた。また、彼女のマンションで、まだ若かった上海時代の写真が所々に飾られ、頻繁に画面に現われている。

20　１分38秒。

21　野谷文昭「ウォン・カーワァイとラテンアメリカの影」、小倉エージ編、前掲著作、51頁。

22　北小路隆志「王家衛的地理学――僕たちはどこからやって来て、どこへ行こうとしているのか」小倉エージ編、前掲著作、70頁。

23　ルルは、仕事仲間には「リャン・フェンイン」という名前を、ヨディの友達と養母には「ミミ」という名前を教えていた。

24　粟米編『花様年華王家衛』中国文学出版社、2001年、44頁。

25　小倉エージ編、前掲著作、23頁。

26　たとえば、香港の借家で隣同士に住む二人が、壁を隔てていながらも、同時に『花様的年華』という40年代の上海の歌に浸っているシーン。

27　前掲著作、14頁。